

一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.38 (2018年7月2日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：東洋音楽学会 沖縄支部

事務局：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4

沖縄県立芸術大学音楽学部 小西潤子

東洋音楽学会 HP： <http://tog.a.la9.jp>

【第70回定例研究会記録】

日時：2018年6月9日(土) 14:00~16:00

場所：沖縄県立芸術大学 首里当蔵キャンパス
一般教育棟 (303教室)

研究発表1 遠藤 美奈

「戦前の沖縄における本土式盆踊りの諸相

—沖縄本島および八重山諸島について—

■発表要旨

本研究の目的は、沖縄が置かれてきた地理的、歴史的な特異性によって育まれることになった沖縄の人びとが持つ複雑なアイデンティティについて、民俗芸能の実践に焦点を当てる。とりわけ、どのような意識と実践をもって、他にルーツを持つ芸能を取り込みながら(あるいは拒絶しながら)今日まで継承してきたのかを明らかにする試みのひとつである。

本研究で注目した芸能は、盆の芸能である。沖縄には盆の時期に念仏を演じる芸能としてエイサー(沖縄本島を中心に)やアンガマ(八重山諸島を中心に)などがある。一方で、櫓を囲み録音媒体で踊る本土式盆踊り(以下「盆踊り」とする)も広く踊られている。新しく移入してきた「盆踊り」を「他文化」の定着の歴史として眺めると、アメリカ統治下の沖縄のエイサーコンクールのなかで盆踊り大会を催したことに強い違和感を感じざるを得ない。まずは、沖縄において「盆踊り」が、いつどのよ

うにして定着したのかを新聞記事から初出を探った。ところが盆踊りはエイサーの通称として記述されてきたこともあって、本研究の対象とする「盆踊り」は1940年代まで見当たらなかった。それまでの期間に記述された盆踊り記事を整理して明らかになったことは、1910年代から夏期に上演される沖縄芝居用の踊りや歌劇の題材に選ばれ、やがてLPレコードの吹き込みにまで至る戦前のエイサーの流行の過程だった。

次に戦前における「盆踊り」の初出として1941年の『海南時報』の記事を紹介した。これまでのところ沖縄本島で発刊された新聞各紙では「盆踊り」が実演された様子は見当たらず、八重山諸島を中心に刊行された『海南時報』にのみ確認できた。「盆踊り」は、農村部における健全な娯楽の推奨を掲げられ、石垣島の市街地にある登野城地区に移入された。当時、風俗改良運動が盛んだったこともあって、例えば沖縄本島の読谷村でも芝居や盆踊り、つまりはエイサーを全廃し、綱曳き、闘牛、運動会といった運動娯楽へと変えていたようだ。登野城では、農林省が奨める作物増産PR曲の《瑞穂踊り》(作詞:岡崎淑郎 作曲:中山晋平/ビクター 1941年7月:V40130/A4220)が演じられたが、それに加えて「盆踊り」のスタイルを維持したままの《クイチャ踊り》《新港節》《前之浜》が八重山芸能の大家大浜津呂、屋部憲賢らによって新たな「盆踊り」演目として加えられていた。戦時下の文化的な営みが制限されるなかであっても、自らの芸能を取り込む姿はとてまたくましい。

このように沖縄では「盆踊り」は、1932年以降に本土でみられる音頭ブームとは異なる背景で移入してきた。登野城地区では、「他文化」の芸能が移入してきたなかであっても、「自文化」との接合を積極的に行い、地域に残る唄や踊りにも大きく影響を残した。今後は、こんにちの演目と当時の演目を明らかにしながら、登野城地区や周辺において聞き取りを行い、「他文化」がもたらす「自文化」の創造の関係についてさらなる考察を深め、戦後のアメリカ統治下における「盆踊り」と比較検討を行っていきたい。

なお、本発表は平成30年度科研費補助事業若手研究B「本土大衆文化の影響にみる近代沖縄の盆踊りに関する基礎的研究（科研費採択課題番号：16K16749）」の研究成果の一部である。



(遠藤 美奈氏の発表)

■傍聴記

遠藤氏の研究は、沖縄の人々の複雑なアイデンティティについて、民俗芸能の実践に焦点を当て、どのような意識の中で沖縄の人々がそれぞれの文脈で芸能に取り組み、今日まで継承してきたかを明らかにすることを目的としたものである。

今回の発表で遠藤氏は、沖縄の盆の芸能を扱う中で、芸能継承の背景に人の移動や、それによって起こる芸能の内容の複雑化に留意し、エイサーやアンガマなど沖縄自らの土地で根付いた芸能を「自文化」、本土から沖縄に入ってきた芸能を「他文化」と位置付けた。

これまでの沖縄の盆踊りの研究といえば、大太鼓やパーランク(片面張りの手持ち太鼓)といった道具が使われる「エイサー」が取り上げられることがほ

とんどだったことに対し、遠藤氏は今回、新聞記事の項目で「エイサー」以外にも、櫓(やぐら)の上でレコードを鳴らし、その周りで人が踊るといった本土から輸入されたスタイルの「盆踊り」の記述を含めて整理した。その両者を考察したことに本研究の意義があるだろう。新聞記事の紹介では、1952年に沖縄本島石川市で行われたコンクールにおいて、第1部が「盆踊り」で第2部が「エイサー」の2部構成だったこと、1941年の石垣市宇登野城では、風俗改良運動の一環として、従来のもとは打って変わり新しい盆踊りが行われたことなど、興味深い事例が取り上げられた。また遠藤氏が現地調査を行なった石垣市白保ではイタシキバラの一環として本土式の盆踊りが行われることが紹介された。イタシキバラは獅子舞が邪気を追い払う行事で、何より獅子舞に注目が集まる行事であるが、その前に白保公民館の前の広場で、地域の人曰く元来人集めのために盆踊りが踊られる。

こうした事例から、遠藤氏は沖縄の盆に行われる芸能は、「自文化」と「他文化」が別々に存在するのではなく、自文化の一部として本土式盆踊りが地域として取り入れられていることもあるかもしれないことを示唆した。多様な文化との接合という意味で芸能に目を向け、沖縄がこれまでに取り入れて積み上げてきた芸能を、今一度捉え直す必要を提示した。

会場からは、本土からの寄留民で八重山に定着した人々の「自文化」と「他文化」はどのように捉えるのか、戦前の本土式盆踊りは生演奏またはレコードものだったのか、レコードを用いた本土式の盆踊りが行われた場合、音響装置はどれくらいの規模のものだったのかなど、活発な意見交換が行われた。

(報告：多和田 真理)

研究発表2 比嘉 悦子

「沖縄のわらべ歌 ―その継承について」

■発表要旨

本発表は沖縄の伝統的なわらべ歌(琉球方言によるわらべ歌)の収集・記録とその継承に携わる人々を紹介し、今後の方向性について考えることを目的

とする。

発表者はこれまでに沖縄県や地域（宜野湾市、浦添市、北谷町、沖縄市、西原町など）から依頼を受けて伝承歌謡の採集に携わってきた。わらべ歌は他の民謡採集の中でも数多く収集され記録されてきたが、沖縄の人々が琉球方言（しまくとぅば）を使わなくなった現在、わらべ歌は歌われる場と機会を失い、忘れ去られようとしている。

発表では、沖縄のわらべ歌の特性と思われる、1) 動物、自然を対象とした歌の多い点、2) 変化に富んだ子守り歌、3) 大人の歌の混入が見られる点などを指摘した後、現在にいたるわらべ歌資料（音源資料を含む）の紹介をした。古いもので、1912年に自費刊行された岩崎卓爾（1869～1937）の『八重山童謡集』、島袋全發（1988～1953）の『沖縄童謡集』

（一誠社、1934年）があるが、その後は多くが作曲家、民俗／民族音楽研究者、言語学者等によって収集・記録されている。わらべ歌集としてまとめられている出版物の他に民俗古謡、民謡採集の一部として掲載、紹介されている資料も多数ある。また、各地の市町村史編集の中で伝承歌謡として地域史研究家たちによって採集・収集されたわらべ歌も多い。

採集された沖縄のわらべ歌の多くは明治、大正生まれの子どもたちが実生活の中で歌い育んできたもので、それらの歌にはその時代ならではの考え方、思いやり、愛情表現、そして家族や自然との向き合い方が示されている。民俗資料としても貴重なわらべ歌を消滅させてはいけなく、次世代の子どもたちに継承させたいと願っている個人や団体によってわらべ歌の継承活動がみられるが、その継承の方法も二つに分かれているように思われる。ひとつのグループは先祖が歌い継いできたわらべ歌を原曲のまま伝承しようとするグループで、二つ目はわらべ歌に楽器伴奏をつけたり、オーケストラにアレンジしたりしてより芸術性の高い楽曲に昇華させて伝える方法だ。

原曲のまま伝えようとするグループに、「ていーだぬふあー童唄会」や「NPO法人・うていーらみや」、宮古島市の「わらべ歌愛好会」などがあるが、このグループは保育園や学童の子どもたちに教えるだけでなく、保育士への指導や親子わらべ歌教室などを開催して遊び歌や子守歌などの伝承活動を行っ

ている。一方、作曲家によってアレンジされたわらべ歌を歌曲として、或いは合唱の演奏レパートリーとして舞台発表する人々は、わらべ歌の持つ特異な旋律、リズム、歌詞に表現されている優しい心を多くの観客に伝えることに貢献していると思われる。

最近では沖縄県主導の「しまくとぅば（方言）普及活動」のツールの一つとしての成人向けわらべ歌講座、わらべ歌ワークショップなどが増加する傾向にあり、わらべ歌は子どもの世界を超え、形骸化した形で継承されつつあることも一つの現象となっている。



（比嘉 悦子氏の発表）

■傍聴記

比嘉悦子さんは鳥々の古謡やわらべうたの調査をライフワークとして、沖縄の民俗音楽の研究に造詣の深い方である。

今日のご発表の出だしは、1912年の岩崎卓爾を出発点とする沖縄わらべうたの研究史であり、各研究者の細部にわたる調査までうまくまとめられていたと思う。

まず、「わらべうたの分類とその特性について」という発表があり、その分類法は、

- 1) 遊び歌 2) 子守歌 3) 歳時の歌
- 4) 天体気象の歌 5) 動物の歌
- 6) からかい歌 7) まじない歌
- 8) 教訓歌 9) その他

となっていた。

この分類法は町田嘉章、浅野健二らの民俗学的で伝統的な分類法と似ているが、発表者独自の分類法なのかについて出典を明らかにしていただきたい。子供の遊びを中心に分類した「東京のわら

べうた研究」(1969)の小泉文夫、小島美子らの分類法も参考にしながら、沖縄のわらべうたらしい特徴のある分類法の研究が今後望まれると思う。

特に沖縄の子供たちがどのように、うたや遊びを生み出し伝播してきたかということに対する興味は尽きない。子供が作り子供から子供へ伝えていくのがわらべうたの基本であり、教訓歌や子守歌など大人が子供のために作ったわらべうた(《ていんさぐぬ花》など)の周辺の歌との違いをはっきりと認識してかかることも大事かと思う。

又、わらべうたには子供の年齢と共に異なるうたが存在しているため、

- ①子供の年齢を1才から12才頃までにどのような歌が生れてきたかを考えてみること
- ②遊び方を中心に考えることで、二人で遊ぶ歌から集団までの歌を考えること

も大事かと思う。

又、沖縄のわらべうたの中には伝統的な方言わらべうたと現代っ子わらべうたがあるので、こちらの方も含めて今後、沖縄の子供文化のあり方を考察していただけたらありがたいと思う。

今や、島くとうばと同じように消滅しつつある子供の伝承文化を如何に後世に継承していくかを考えるとき、わらべうたを知らない母親や教師たちに、もう一度わらべうたを教え、それを子供たちに返すことの作業をすることで伝承わらべうたがどのように生き残るかじっくりと考えたい時期である。

今回は発表の時間が足りないため比嘉さんのご発表がこれまでの歴史的な沖縄わらべうたの研究者の紹介に時間をさかれて、肝心なわらべうたをどう継承していくべきかという大事なテーマにふれる時間が少なかったのは残念だった。

発表者比嘉悦子さんのこれまでの各地のわらべうた採集の集大成として、益々の深いご研究とさらなる研究発表を期待したい。

(報告：高江洲 義寛)

東洋音楽学会 沖縄支部通信 No.38 編集委員
岡田恵美、三島わかな、古謝麻耶子